

弥生



vol. 11 大地

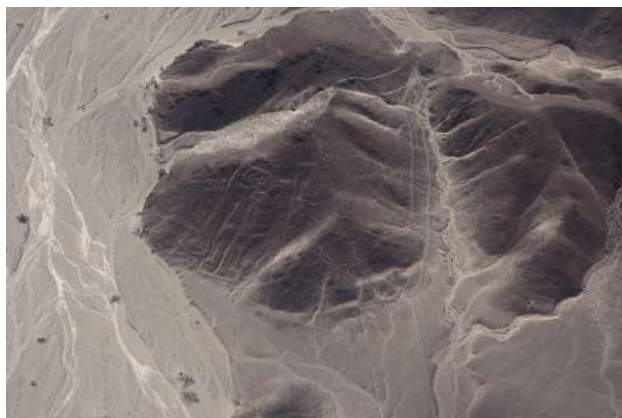
平成29年4月発行 弥生神社

車窓よりく白石市
(写真…荒谷美子)



弥生 vol.11 「大地」

- 03・・・・・・ お宮の風景「年越の大祓～初詣」
- 04・・・・・・ ワークショップ「歳神様と縁起物～熊手を飾ろう」
- 05・・・・・・ ワークショップ「新年を寿ぐ 手づくりのしつらえ」
- 06-07・・・・・・ ワークショップ「祈りと香りを包んで結ぶ～お守り袋づくり」
- 08・・・・・・ 植物紀行「桜」 荒谷 渚
- 09・・・・・・ 地鎮祭のこと / Photo「大地～神様のいるところ～」
- 10・・・・・・ ー記憶の中の音と像ー大地 / Photo
- 11・・・・・・ マーラー「大地の歌」とパールバックの「大地」 K. JUNKO
- 12・・・・・・ 「大地讃頌」モリタケト
- 13・・・・・・ 10本の映画「大地の手触り」谷口悌三
- 14・・・・・・ 本を読む 「大地」を考える5冊 小河洋友
- 15・・・・・・ 旅の止まり木・5「私の大地」谷口明子
- 16・・・・・・ 授与品紹介 / 編集後記



【表紙の写真】
ペルー、ナスカの地上絵で知られるフマナ平原の奥に沈む夕日。数百ものライン、図形、動植物等がこの地に刻まれている。左の地上絵は「鼻頭の人間」もしくは「宇宙飛行士」と現地で紹介されている。

(写真 工藤福太郎)



平成28年12月31日 年越の大祓

90名ほどの方々が参列し茅の輪をくぐり人形でお祓いをしました。

平成29年元旦 初詣

境内の御札所にもぎわいました。

お宮の風景



『大祓詞』 書写会



弥生神社では『大祓詞』書写会を行っています。境内の掲示板やご希望の方には御葉書で、オンラインでは弥生神社のTwitter、Facebookでご案内しております。

掲示板

どなたでも参列できます。

午後三時より

平成二十九年六月三十日

夏越の大祓

なごし おおはらへ



「～歳神さまと縁起物～熊手を飾ろう」



そして、竹製の小さな熊手を植物や和紙、江戸打ち紐、縮緬、水引、繭玉、トンボ玉など様々な素材を使って飾りつけました。新たなアイデアや技が次々生まれて、皆さんそれぞれのにぎやかな熊手ができあがりました。

平成二十八年十二月十日、熊手を飾るワークショップを開催しました。拝殿にて参拝した後、縁起熊手の由来を学びました。



昨年に続き2度目の熊手作り。決められた材料で作ってるのに、みなさんの熊手アイデアにはびっくり！似ているようで、全く違う作品。アットホームな雰囲気の弥生神社ワークショップが大好き(・_・)

MESSAGE

初めてのワークショップ参加でした。配置やバランスを考えたりと、楽しく作成できました～。手作りのお料理&お菓子、美味しかったです！ご馳走さまでした！

MESSAGE



ワークショップ@弥生神社

ことは

「新年を 寿ぐ 手作りのしつらえ」



参加の皆さん同士で折り方を教え合ったり、アイデアを出し合ったりと和やかな雰囲気でした。年末の慌しさから離れてゆったりとした時間を過ごしました。

そして、水引や和紙、植物を使って、箸袋や箸置きなどを作りました。竹筒を花瓶に正月アレンジメントも華やかにできあがりました。

平成二十八年十二月二十三日。冬晴れの暖かな日に、ワークショップ「新年を寿ぐ手づくりのしつらえ」を開きました。拝殿にて参拝の後「祝い箸」の意味や使い方について学びました。

～季節の手づくり和菓子～

椿餅



そして、ミニ最中。



祝い箸と折鶴の箸置き



竹筒と季節の草花のアレンジメント



「祈りと香りを包んで結ぶ〜お守り袋づくり」



ワークショップ「祈りと香りを包んで結ぶ〜お守り袋づくり」を、二月十一日、十二日に開催しました。

絹布を中心に、縮緬^{ちりめん}、紬^{つむぎ}など色とりどりの材料から、布の色柄の組み合わせから紐の色まで、皆さん考え抜いたデザインは個性豊かで、できあがった袋は新鮮で驚きの連続でした。

小学生が七人もご参加。アイロンかけや縫い合わせ、紐結びにチャレンジする方もいて、大人も驚くような出来栄でした。

お好きな香りもつめ込んで、世界でたったひとつの御守り袋。皆さん嬉しそうに、袋の中に木札を納めていました。

*ご参加の皆さまよりメッセージをいただきました。ありがとうございます。

素敵なお守り袋ができ、ありがとうございました！想いを込めて 心を込めて 祈りを込めてちくちく 一針一針自分の内側を観じる時間でもありました。

MESSAGE



最近 弥生神社でのワークショップにはまっています。今日は、オリジナルのお守り作り。いろいろな布地をアレコレと組み合わせるのが、ワクワク。可愛いのが出来て、小学生の女の子に思わず自慢しちゃいました。初めてお会いする方達との世間話も大切な時間。

MESSAGE





裁縫が苦手な私は、何度も手をチクチクと縫いながらでしたが、夢中で集中出来た時間は、本当に楽しかったです。

MESSAGE

母も、娘と帰り道にな楽しかったね〜と、お守りの話をしながら帰宅しました♪楽しい時間をありがとうございました(*^^*)また、参加したいと思うので次回の催しを楽しみにしています☆

MESSAGE



昨日はありがとうございました。お守り袋を作るという発想がなかったので作れて嬉しかったです。今日は、私のお誕生日で 自分への良いプレゼントが出来ました。おやつやR-ズヒップティー とても美味しかったです。ありがとうございました(^_^)/

MESSAGE



娘と娘の友達で参加させていただきました。ありがとうございました！素敵なお守りが出来ました。また、機会がありましたら参加させていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

MESSAGE



桜



日本に住む私達にとって、最も親しみのある花木の一つである、桜。正確には「サクラ」というのはバラ科サクラ属の落葉樹の総称で、自生種、園芸品種を合わせると数百種類もの「サクラ」があります。日本で最も多く植えられている染井吉野が有名ですが、黄色い花の鬱金桜、秋々早春に二度も咲く十月桜など、色形から咲く時期まで多種多様です。しかし、そもそもなぜ「サクラ」という名で呼ばれるようになったのか、ご存知でしょうか。あまりにも身近な存在で、疑問に思われることが少ないのではないのでしょうか。サクラの名の由来については、幾つかの説がありますが、その中でも代表的なものを一つご紹介します。

古来より日本では稲作が行われていましたが、食文化の中心である米を作ることは、大昔の人々にとっては今以上に生命に関わる重要な仕事でありました。現代では正確に年月を数えられるカレンダーがありますが、まだ暦が普及していない当時の人々は、農耕を始める正しい時期を知る方法として、季節による自然の変化に目を向けていました。春になると、山々に宿る神様がサクラの木に宿り、美しい花々を咲かせながら里に降りてきて、村人に稲作の始まりを告げる、と考えられていました。この神様のことを「サ」（サ神様）と呼んだため、神様が宿る場所である「クラ」（御座）と合わさり、「神様の御座の木」という意味で



鬱金桜

サクラと呼ばれるようになったということです。ただ目に美しいだけでなく、人々の生活を支える為に欠かせない存在であったのですね。

現代でも、桜は各地に春の訪れを知らせてくれるだけでなく、お花見で全国に多くの観光客を呼ぶことで、経済面でも一役買ってくれています。小さく可憐な花を見事なまでに一斉に咲かせ、あつという間に潔く散る、そんな豪快で少し淋しさを感じさせる性質も、ものあはれを尊ぶ日本人に長らく愛される要因の一つでしょうか。サクラという花を見つめ直すことは、古来より続く人と自然の関係の深さ、大切さを教えてくれるようです。

写真：筆者撮影

じちんさい

地鎮祭のこと

地鎮祭は、「とこしずめのまつり」とも読めます。建物の新築や土木工事の起工の際などに、その土地の神様を祀り、工事が無事に進行することと建造物が未長く安全堅固であることを祈願するために、おこなわれる祭りです。

地勧請（じかんじょう）、鎮（しずめ）、地曳（じびき）、地祭（じまつり）、鎮祭（ちんさい）、鎮謝（ちんしゃ）などの別称があります。国土の守護神である大地主神（おおとこぬしのかみ）と、その地域の神様である産土神（うぶすなのかみ）、またその土地の神々である「此の地を宇志波伎坐（うしはきます）大神等」をお祀りします。

これらの儀礼は土木、建築工事のうち基礎工事に着手する前の段階で行われます。地鎮祭は地域によりお祭りの仕方が異なる場合がありますが、基本的な祭儀の流れは神社の祭儀とほぼ同様です。そのなかでも地鎮祭を特徴づけるのは次の三つの行事です。

まずは祓（はらい）の行事。「四方祓（しほうはらい）」の儀と称して、祭場四方の敷地を大麻で祓ったり、半紙と麻を切って作った切麻（きりぬさ）などを撒き、祓い清めます。

次に起工の行事。「刈初（かりぞめ）の儀」・「穿初（うがちぞめ）の儀」と称して、施主・施工者が忌鎌（いみかま）・忌鋤（いみくわ）・忌鋤（いみすき）などにより、草を刈り、地を穿つ（掘る）所作をおこない、神様に工事の開始を奉告します。

そして、供物の行事。「鎮物（しずめもの）埋納の儀」と称して、神霊を和め鎮めるために鎮物の品を捧げて、工事の無事安全を祈念します。

このような地鎮祭には、土地の神に敬意をはらい、使用の許しを得て、工事の安全と生活の平安を祈願するという意味があります。

【参考】

國學院大學日本文化研究所『神道事典』
神社本庁教学研究所監修 『神道いろは
神社と祭の基礎知識』

「長野県白駒池のほとりにある原生林、苔の森。雨が降る早朝の朝霧に包まれた原生林は巖かで神々のが静かに休む場所に相応しい、静かな気に包まれていました。」



*photo (写真家 川添 毅 twitter: @tsuyoshi_1973さん)



THE COINTREAU (2016)

気球に乗ってどこまでも

「気球に乗った時に見える広い大地
を想像できるから」 爽子さん

「ひとりぼっちの校庭も大地。夕焼けで
染まった影を見ていると大地で生きてい
るなと思う」 翠子さん & 周子さん

「大地」をテーマに印象に残ってい
る音楽や映像を選んでいただきました。
た。八歳から大人まで。様々な「大
地」の風景や鼓動を感じます。

さんしょう 大地讃頌

大地と聞くと、「大地讃頌」の合唱が思
い浮かぶ。私は学校の教員をしている
が、以前いた学校では卒業合唱の曲で
あった。何年か前に秋にインフルエンザ
が流行して、合唱コンクールが中止にな
り、なんと3月にコンクールを行うこと
になった。当時私は3年生の担任であ
ったが、卒業式の1週間ほど前のコンク
ールとは未だかつてない。コンクール
では、各クラス自由曲と課題曲を歌うの
だが、3年生だけは大地讃頌が課題曲に

なった。この曲はもともとオーケスト
ラ向けに作られたもので、とても壮大
で伴奏が難しい。私のクラスにはこの
伴奏が弾ける技量の生徒がいなかった
ので、コンクールはアカペラで臨ん
だ。練習の成果を出して立派に歌いき
り、入賞もした。卒業を間近に控え、
歌詞にあるように「母なる大地の懷
に、我ら人の子のよろこびはある。」
を中学生なりに実感していたのではと
思う。今でも「大地讃頌」は彼らの声
で私の中に蘇る。（K・I さん）

「よくスマホで夕焼けの写真を
撮ってます。この時は仕事帰りに
気がついてあわてて車を停めて撮
りました。私が夕焼けにハマった
原点の写真です。富士山が写って
るところも大好きです。撮影地：藤
沢市長後市民センター裏」

*photo （#夕焼けダッシュユさん）



*photo (P9.10) 「大地～神様のいるところ～」をテーマに写真を寄せていただきました。

マーラー「大地の歌」と

パールバックの「大地」

音楽ならマーラー「大地の歌」、文学だとパール・バック「大地」が真っ先に思い出されます。マーラーの「大地の歌」は、高校生の頃、某酒造会社のCMで使われていて知った曲。鳥獣戯画を彷彿とさせる墨絵のアニメーションに、朗々と男声が響く第三楽章が重なった内容で、大地の恵みである天候の移り変わりを思わせる素晴らしいCMでした。

一方、パールバックの「大地」は中学時代に読んだきりで詳細は覚えていないのですが、中国の農家の栄枯盛衰というか、本当に土(earth)のにおいが鼻に迫るような話です。マーラーの大地の歌は交響曲というより歌曲で、ドイツ語、パールバックは英語ですが、いずれもearthという単語がタイトルにあります。定冠詞の付かないearthは土のイメージで、どちらも西洋人が作ったのになんだか湿度と土の匂いをするのです。

マーラーの「大地の歌」のタイトルはパールバックのこのノーベル文学賞作品の影響があるとされているそうです。私の高校は公立には珍しい音楽専科があり、私の部活仲間がこのマーラーの作品を披露したのですが、歌詞は、李白の漢詩をベースに、ドイツの詩人が書いた青春の歌であることを知りました。なんだか欧州らしくないイメージは当然なのでしょう。

当時は子どもでわかっていなかったのだけれど、作品を作った頃のマーラーの脱・欧州意識と異国への憧憬みたいなものが、西洋音楽のルールを使っているにも滲み出るのですね。

パールバックもアメリカ人ですが、宣教師の娘として中国大陸に長く住んだことで、操る言語は英語でも、同じ農耕民族の裔である私にも大いに共感が湧くような、アジアならではの大地とか自然とかが持つ過酷さとか果てしなさとか大らかさが描けたのだらうと思います。パールバックの「大地」では、農家女性の不条理な立場もきっちり書いてあり、子供のときから男尊女卑色濃い地元で生きづらさを感じていた私には、本当に噴飯もののくだりもありました。

ただパールバックはそれを西洋的視線から糾弾するというよりは、儒教的背景もちゃんと捉えていたと記憶しています。今思えば彼女が素晴らしかったのは、アジア人に対して後進国、低い文明度、という視点を持ってこなかったことなのだろうと思います。(K・JUNKO)

パール・S・バック『大地』

(The Good Earth 1931)



(岩波文庫)

小野寺健/訳



(新潮文庫)

新居格/訳



マーラー 交響曲「大地の歌」
ベルリン・フィルハーモニー管弦
楽団 指揮：ヘルベルト・フォン・
カラヤン



「大地讃頌」

「大地」をイメージする曲といえば、条件反射のごとく口ずさんでしまう歌がある。「大地讃頌」——言わずと知れた合唱曲の定番である。中学校の合唱コンクールや卒業式で歌った方も多いと思う。

しかしこの曲が、じつは反戦歌ともいうべき「カンタータ『土の歌』」という作品の中の一曲であることはご存知だろうか。「土の歌」は七楽章からなり、「大地讃頌」はその終曲である。「土の歌」全体を貫くテーマは、土・大地への畏敬と対する人間の度し難さである。人間は土から生まれ、土に還る。しかし人間は争い、原爆で土を穢した。平和に生き、大地の恩寵に感謝せよ、と語られる。（このテーマは「風の谷のナウシカ」とも重なる）

「大地讃頌」がこうしたストーリーの最後に位置づけられていることを知れば、「たまたえよ大地を ああ」という歌詞もさらに重みを増して聴こえてくるのではないだろうか。

この曲はもともとオーケストラ伴奏で書かれたものだが、多くの人が知っているのはピアノ伴奏版だろう。個人的にもピアノ伴奏のものが好きだ。



コーラスは、厳かに響きわたるピアノとともに、「母なる大地」がどつしりと湧き上がるように始まる。続くピアノの間奏。力強い低音の上に和音が上昇していく旋律は胸を打つ。そして終盤の「たたえよ 土を」の響きはなんとも神々しく、その歌声は地鳴りのごとく絶頂を迎え天に昇っていく。

もし可能ならこの名曲を丹下健三設計「東京カテドラル大聖堂」で聴いてみたい。大地からそり立つようなその内外部の威容と相まって、限らない感動が得られることは間違いないだろう。

モリタケト（書籍編集者）

写真：東京カテドラル大聖堂（筆者撮影）



『真夜中のサバナ』（クリント・イーストウッド／1997）のファーストシーン、K.d. ラングが歌う「スカイラーク（ひばり）」とともに鳥瞰のカメラが草原を滑るようにとらえ、その大地の肌触りに文字通り鳥肌がたつような官能を覚えた。◆『ニッポン国 古屋敷村』（小川紳介／1983）で稲穂を揺らす風、それは冷害をもたらす風にも変わる。その仕組みを説明する模型実験が撮影され、ドライアイスの冷気が山の斜面を滑り落ちてくる、その肌触りが禍々しくも美しい。◆『ストロンボリ』（ロベルト・ロッセリーニ／1949）では、イタリアの火山島の岩斜面をイングリッド・バーグマンがおぼつかない足取りで歩いていく。銀幕のスターを溶岩で凸凹のスクリーンに放り出すというコントラストが生々しい。◆フランスでは、道なき荒地を彷徨うと何かに出会ってしまう。『悪魔の陽の下に』（モーリス・ピアラ／1987）では神父が悪魔と取引するという試練を迎えるし、『ボネット』（ジャック・ドワイヨン／1996）では四歳の女の子が追い求めていた死んだ母親との再会を果たすのも荒地の中だった。大地に刻

10本の映画

「大地の手触り」

谷口悌三（映像作家）



まれた道から離れてみる勇氣をもつことが大事なのだ。◆『消えた画 クメール・ルージュの真実』（リティ・パン／2013）は、カンボジアの恐怖政治の時代をクレイアニメーションで描く。その人形の土は強制労働によって多くの命が奪われた荒地から採られたもので、鎮魂が込められていた。◆『エル・スール』（ビクトル・エリセ／1983）で象徴的なのは、スペインの荒

地で振り子を揺らしてダウジングする父親、それを側で見ている娘の姿。地下に眠る水脈を探す静けさと大地を見つめる二人のうつむいた視線に永遠を感じる。◆『アンダーグラウンド』（エミール・クストリッツァ／1995）は地上と地下を往復しながら重層的にユーゴスラビアの激動の時代が描かれる。地上が戦乱で荒らされても地下には民族の歴史という豊かさが残る、という足元の力強さが印象深い。◆『風の谷のナウシカ』（宮崎駿／1984）は、地上／地下の死／再生を風でつないでみせる。終盤の「風が止まった・・・」という不吉な台詞は、『六ヶ所村 ラプソディー』（鎌仲ひとみ／2006）で吹いていた汚染された風の不吉さに継承された。◆そして、『ミツバチの羽音と地球の回転』（鎌仲ひとみ／2010）、これを観た半年後に起こった東北の大震災と原発事故。なんと近未来を撮ってしまったドキュメンタリー映画だった。太陽光や風力・地熱といった大地が生み出す再生可能エネルギーの底力を信じようという啓発は、ナウシカの「大丈夫」という言葉をスクリーンに提示してみせたものだった。



本を読む。

小河洋友 (図書館司書)

日本列島100万年史

山崎晴雄 久保純子 [著]

講談社 2017.1



大地の神話

ユーラシアの伝承

金光仁三郎 [著]

中央大学出版部 2009.10



日本文学の大地

中沢新一 [著]

KADOKAWA 2015.2



大地の五億年

せめぎあう土と生き物たち

藤井一至 [著]

山と溪谷社 2015.11



大地の肖像

藤井譲治 金田章裕
杉山正明 [編]

京都大学学術出版会
2007.4



わずか六千年前には東京の半分は海だった！千五百万年前、ユーラシア大陸東端から分かれて生まれた日本列島。現在私たちが目にする風景を主に形作った百万年前以降（第四紀後半）を中心に、日本列島激動の変遷を解説しています。

古代メソポタミアの地母神を源とした植物神話・竜退治など、ユーラシア大陸各地に伝わる神話には多くの共通話素があるとのこと。各文化圏を横断する話素はどこで生まれ、どこから伝来したのか？各地の類似した変形譚を比較し、考察していきます。

日本の傑作古典文学の地層奥深くにダイヴし、日本人の「心的空間」を描き出します。古典文学を生み出した心的な空間の最大の特徴は、その空間の中では自然と文化が分離されないところにあるとのこと。原文の一部と現代語訳も掲載しています。

土壌学者である著者が、五億年の大地の歴史を掘り起こし、生き物たちの歩みを追います。どのようにして生き物たちは土との付き合い方を身に着けたのか？ヒトはなぜ土を耕し、さまざまな農業を発達させたのか？見方を百八十度変えた自然史・人類史です。

大地を写し、描くこと。それは一体どのような行為だったのか？時を越えて、ありし日のひとびとの暮らし・営み・想いそして智慧や工夫の跡をさまざまに伝える絵画・地図を考察していきます。貴重な絵画・地図をカラー口絵で四十ページにわたり掲載。

「大地」を考える本 今回は「大地」をキーワードに五冊を選んでみました。現代に生きる私たちは特段意識することのない「大地」。ものの見方をまさしく足元から揺さぶられる本ばかりです。

私の大地

谷口明子（陶芸家）



私にあてがわれた大地の恵み

大地とはなんだろうか。母なる大地、肥沃な大地・・・地球を感じさせる広大な土地・・・いくら考えても、自分の生活圏内にはそのような形容がしっくりくる大地は思い当たらない。ということは、私に大地はないのか。いや、そんなことはないはずで、道路の舗装のひび割れから毎年必ず草が生えたり、時には下から木の根がコンクリートを突き上げて舗装が盛り上がったりすることからも、人工の諸々によって表面上隠れてしまっているだけで、我々の足元深くには全力の「大地」が凝然と存在していることが知れる。都心部は地下工事で深くまで加工が進み、地上を歩いていてもなんだか足元が空洞なような、ふかふかするような頼りない感じを覚えることもあるが、それでも人間の加工の及ばない最深部には圧倒的な「大地」が埋まっていて、私たちの手が届く範囲など地球の上澄みみたいな部分に過ぎず、いつ覆されてもやむを得ないのだと思うと、恐怖とともに謎の安堵も覚える。全く勝ち目がない相手に対するさわやかなあきらめに似た気持ち湧き、楽しくなってくる。

さて・・・、今、ふと机の上に目をやると、草のちぎったのが三種類ある。これは私が道路沿いに生えていたのを採ってきて、気に入らずと飾っていたらいつしか完全に乾燥してさらにいい感じになったものであるが、これが、もしかして、言ってみれば、私にとっての大地の恵みかもしれない、と思いつつ、晩酌の準備に取りかかる夜です。

授与品紹介

弥生神社の授与品を紹介します。お守り袋のデザインは当社オリジナルです。御札所にて頒布しております。



子授け守り

「菜の花と小川、飛び立つコウノトリ」



子授け守り

「枝垂れ桜と小川で安らぐコウノトリ」



学業守り

「奥深い森と山々、霞。困難をのり
越えきつと光がみえるでしょう」



しあわせ守り
優しい鈴の音。春を呼ぶように幸せ
が訪れますように



社務猫きーこ

お祭りといえはば…
今年も花火がドン
ドン上がるのだ
わ！ひゃく！押
し入れに避難しな
いと！

私も花火は苦手
よ。猫部屋のメ
ダカもびっくり
だわ！



社務猫ちよろ

編集後記

◆例大祭に合わせたの発行となりました。ご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。また、行事のたびごとに感想を寄せてくださる皆様ありがとうございます。◆ワークショップは季節ごとに開催しております。初めての方もお気軽にご参加ください。大人だけでなく小中学生や赤ちゃんまで様々な方と時間を共有し、学び手を動かしています。ものづくりを通しての自然な交流は気持ちを穏やかにしてくれます。神社という場所の力も感じます◆神道では土地の神々をお祀りします。あらゆる生命の母体となる大地、恵みをもたらす大地への人々の畏敬と感謝の心がそのもとにあるでしょう。労働や日々の暮らしを通して、大地の力、鼓動を自分自身の鼓動と重ねて、身体全体で感じていたのではないのでしょうか。◆毎日、足で踏みコンクリートの下に生きている大地。普段忘れがちな「大地」への感覚とイメージを、今号では様々な角度から表現していただきました。◆大地に根を張る桜の木。蕾から花が開いてやがて散り、新緑となることを当たり前とせず、その不思議さと尊さを感じていたものです。（権）



Facebook



Twitter

編集・発行 弥生神社

海老名市国分北一・十三・十三